

# 患者当事者の利用に耐える健康・医療情報サービス構築への提言 —公共図書館を例として—

西河内 靖泰, 石井 保志

## A Proposal to Build Health and Medical Information Services for Patients' Self-Use: Public Libraries as an Example

Yasuhiro NISHIGOUCHI  
Yasushi ISHII

### Abstract

Public libraries are currently expanding efforts to actively offer health, sickness, and medical treatment-related information to citizens. Although the amount of such health and medical information services at public libraries is increasing, the content quality is extremely poor.

While it can be said that the existence of a nearby, familiar space that in itself enables the public to come into contact with health and medical information is beneficial, I have heard that patients who actually visited this area were often disappointed.

This is because of the severe lack of variety and content of the materials offered in such a place. The cause of this is not a lack of funds for these materials, but rather a lack of clarity in the initial concept of what is needed for a collection of health and medical information for the public, as well as a superficial understanding of this topic among those compiling the collection.

The tendency to select materials that are not in line with patient needs and an excessive fear of medical textbooks arising from sometimes-lacking expert knowledge are the greatest obstacles to providing materials that are suitable for patients' self-use.

In order to overcome this deficiency in public libraries and offer a health and medical information service that is useful to patients, I would like to consider what information is required by patients through examples I have selected.

As a patient myself who has sought medical and health information in public libraries and as a person who raised the issue of services that go beyond the actual library facility, I would like to make a proposal to further improve library health and medical information services to make this space more useful.

### 【1】はじめに～この提言に至る背景について

全国で3,200を超える公共図書館のうち、200館以上が「健康・医療情報サービス」に取り組んでいる。この「健康・医療情報サービス」は、図書館（公共図書館以外にも、医療機関の患者図書室や医科・看護系大学図書館などで

も設置されているところもあるが、ここでは公共図書館に絞って論じる)で、市民が自分自身や家族のために、病気や治療法などを調べやすいようにコーナー化したサービスを指すものである。

文部科学省の図書館をハブとしたネットワークの在り方に関する研究会が、2005年1月に出した『地域の情報ハブとしての図書館－課題解決型の図書館を目指して－』では、「高度情報化社会においては、図書館の使命である情報の体系化・整理という役割は、ますます重要性を帯びてくるものと考えられる。特に、地域における情報基盤の整備を受けて、地域社会における様々な資料や情報を有効活用できるように供することによって、地域の課題解決やそのための人々の取組への展開を支援すること等、図書館には重要な役割を果たすことが期待されている」とし、「目指すべき公共図書館の取組として優先すべき課題候補」のひとつとして、「医療関連情報の提供」をあげている。こうした報告・提言に応える取り組みとして、図書館での「健康・医療情報サービス」が進んできた(引用・参考文献①)。

以前から、公共図書館には家庭医学書などを中心に医療関係図書の所蔵があったものの、図書館側が「健康・医療情報サービスコーナー」として図書館利用者へ向けて、そのサービスを積極的にアピールしたのは2004年以降になる。それら公共図書館の「健康・医療情報サービス」と称するサービス内容を見ると、例えば、独立したコーナーの設置、パンフレットの配布、パスファインダーの作成、医療講演会やセミナー開催などが多い(引用・参考文献②③④⑤⑥)。しかし、筆者らは、このようなコーナーでのサービスの現状には、以前から常々疑問を持っていた。それは、実際にはそれらのコーナーに置かれている資料自体が、患者の役に立つものが少ないため、例えそうしたコーナーへ患者・市民が行ったところでほとんど収穫がないことが多いという声を聞くことが現実だったからである。

公共図書館という存在は、市民の「知る権利」を保障するための公的な「人権機関」にはかならない。そもそもこの社会には、いいものも良くないものも含めて多様な資料が存在しているのであるから、それを取捨選択しながら、人びとは自分たちの役に立てていくものである。それなのに、入手が容易な一般的な書籍中心の情報提供だけで済ましては、その使命を果たすことができるであろうか。図書館としての本来の役割を、全うできないとの批判が出てきても仕方がないのではないか。「健康・医療情報サービス」も同様に、書店に並ぶ家庭医学書のみを図書館で提供するだけであっては、図書館の職務怠慢と受け止められてもしかたがないといえよう。しかし、現実にはその状況に近い「健康・医療情報サービス」が多いと言わざるを得ないのである。

筆者の一人(西河内)は、大学で医療社会学を専攻し、大学卒業後、1976年東京都荒川区役所に入り、年金課、保健所勤務を経て、1988年に図書館に異動する。その後、滋賀県で2つの町立図書館の館長職を含め、図書館勤務は23年間になる。区役所の新任職員のとくに、急性の肝臓障害で倒れて以来、患者運動に30年以上関わってきた。患者運動とともに図書館への異動を機に取り組み始めた図書館運動に関わりながら、患者の立場から見た公共図書館の健康・医療情報サービスの課題について、もう一人の筆者(石井)とともに、様々な実践活動に取り組んできた。その中から見えてきた、今後の公共図書館における「健康・医療情報サービス」のあり方について、関わった事例をもとに、提言していきたい。

## 【2】なぜ患者は役に立たないと感じるのか。

多くの公共図書館の「健康・医療情報コーナー」での資料提供には、2つの特徴が見られる。

1つ目は、既存の所蔵資料を生かした家庭医学書などの一般的な図書が多く、医学系の専門書が少ないこと。家庭医学書や事典などが中心のコーナーでは、利用者は一応の「医学情報」の知識は得られるものの、それだけではあくまで患者の情報ニーズの一面を満たすに過ぎない。市場で流通し書店で売られている書籍の多くは、多くの人に読んでもらえるように一般的な知識を提供する編集になっており、ピンポイントでディープな情報は軽視され

がちである。

多くの患者当事者が求めているのは、そうした一般的な知識ではなく、極めて個別的な情報である。医療者からみれば、多くの症例にあてはまっているとしても、患者はそれが自分の症状にあったものか実際よくわからない。本に書かれていることだけでは、患者が知りたい情報の全貌には迫ってこない。書店と同様の図書のラインナップでは、結局のところ一般的・概説的な情報提供にしかになっていないのである。

このことから、一面的で大衆的な情報や類書で占められているコーナーの現状を俯瞰すると、所詮、公共図書館の「健康・医療情報コーナー」は、今のところ、一般向けの医学情報に特化しただけのコーナーでしかないと言わざるをえない。

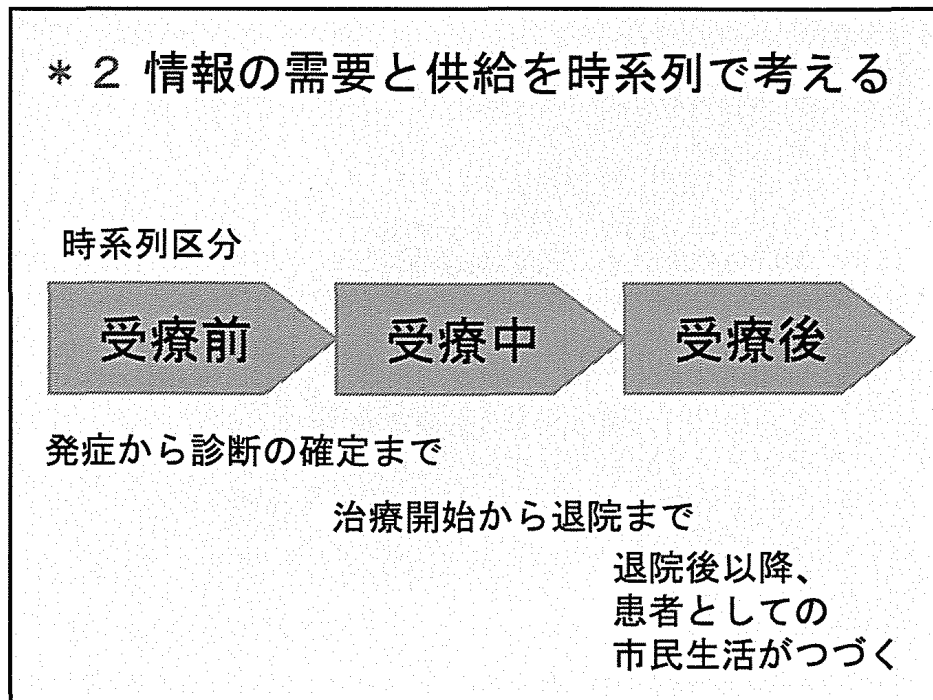
### 【3】情報提供の時間設定

2つ目の特徴としては、図書館が資料の性格を受療期間に限定して設定している傾向がみられる。「受療期間」とは、診療を受けている期間を指す。「健康・医療情報コーナー」で提供される情報の多くは、病院にかかる直前に必要な情報や、病院で受診する際に必要となる情報が中心を占め、蔵書として偏りの多いものとなっている。具体的に言うと、「病院選びの本」、「がんに罹ったときに読む本」などの疾病の罹患直後の情報ニーズに対応する資料である。

「受療期間」といっても、その期間を便宜上大別すると、高度急性期・急性期・慢性期、回復期（図1）と区分できる。患者のおかれている状況は様々である。健康な人が急に病気になった時に必要な情報はもちろん重要だが、それだけでは一時的な情報ニーズに対応しているにすぎなく、充分なものとはなっていない。家庭医学書のようなタイプの情報には、病気の医学的解説に重点が置かれた内容が多く、患者が以後過ごさなければならない生活に関連した事項については、ページ数があまり割かれていないのが特徴である。

現在の公共図書館で取り組まれている「健康・医療情報サービス」の特徴について、2つ挙げた。「家庭医学書中心の蔵書構成」と「利用者のタイムスパンを限定した資料」だということである。

この2つの特徴が示すことは、医療問題や患者運動に永く関わってきた筆者らの視点からみると、公共図書館の「健康・医療情報サービス」が、いまだ患者・市民に役立つ資料群となりえていない要因と認識せざるをえない。公共図書館は、資料・情報の提供を通して、市民に対して知る権利を保障する教育機関である。市民の趣味・娯楽・一般教養に加え、生活に役立ち、課題解決に役立つ資料を提供する生涯学習施設として存在するがゆえに、そのため税金が使われているのである。であるなら市民に役立つ情報提供をしていないのでは、どうなのだろう。患者も市民である。当然、役立つ情報が提供されていなければならないはずではないだろうか。



(図1) 時系列区分 (出典 : 「平成 24(2012) 年度厚生労働科学研究費補助金 疾病・障害対策研究分野 第3次 対がん総合戦略研究 : 国民のがん情報不足感の解消に向けた「患者視点情報」のデータベース構築とその活用・影響に関する研究「乳がん闘病記分析の取り組み」(石井ほか) 発表資料より)

#### 【4】図書館が想定する患者ニーズ

多くの公共図書館で考えられている「病気になって困ったら役立つコーナー」とは、どんなものだろう。普段は健康だった人が病気になって、利用してもらうことを無意識に想定してはいないだろうか。実際には、病気で入院し退院したら解決するような患者より、病院で診療して治療してもらったら解決するどころか、「治らない」患者も多く存在するのである。その人たちの存在を認識できていなければ、多様な情報ニーズに対応できる資料提供はできないはずがない。

病気の概要的な資料が大半を占め、医学的に正確で客観的な情報という枠をはめて提供しようとする傾向が大変強いのが、多くの公共図書館の「健康・医療情報コーナー」の現実である。それ自体を全否定するつもりはないが、患者の具体的な問題に日々接してきた筆者らにとっては、そうしたコーナーの現実、患者の置かれた状況を考慮することが不足しているものと言わざるを得ない。患者当事者から見ると、図書館側の独りよがりのコーナーと受け止められかねないのである。

患者の望む情報は一様ではない。概論的な医学情報に加えて、個別性の高い情報を欲している。さらには、患者は、病気の情報以上に、病気に付随した生活面についての関係の深い情報も求めている。実際に、患者が欲しい情報とは、身体的、心理的、社会的な面に関わる多様な情報なのである。

難病や慢性疾患をかかえた患者の治療には、長い年月がかかる。病院へ通院し、投薬治療を受けたところで完治するものではないが現実である。社会生活や食生活にも制限がある。実際に、多くの人びとは仕事を続けられる



のかどうかなど、先行きが見えないときも多々ある。常に、経済的な問題、治療による副作用や後遺症、こころの問題など、病気が日常生活に及ぼす影響や悩み・苦しみ・不安など、様々に知りたいことがでてくるのである。

このように患者が実に多様な情報を求めていることを、まず、第一に知ることが大切である。この当事者視点を本当に認識していれば、図書館は、こうした要求に応じた資料提供を実現できているはずなのである。

## 【5】多様な資料と資料評価

患者の望む情報は一様ではなく、概論的な医学情報に加え、個別性の高い情報を欲している。患者は、病気の情報以上に、病気に付随した生活に対する情報を求めている。患者が欲しい情報は、3つのポイントに区分できる。Physical（身体的）、Psycho（心理的）、Social（社会的）な情報である。その病気ということが自分の身におこるか、手術や治療が自分にとってどう影響するか、QOL がどれだけ低下し日常生活がどう変化してしまうかなどのことを知りたいのである。

医療情報サービスには、当事者視点は欠かせない。だが、現状は当事者視点が欠如しているため、これらのポイントに応じた資料提供になっていない。

では、どのような資料提供を行えばよいのだろうか。2006年に市民研究グループ「健康情報棚プロジェクト」が患者団体と共同研究した成果（引用・参考文献⑦）をもとに公共図書館向けの「健康・医療情報コーナー」に備えるべき、多様な資料と資料特性を紹介する。

### 1) 様々な利用者を想定

患者本人、患者家族、子ども、医療者、市民、etc…。

「子ども」は将来の患者予備軍と位置づけ、医療に対する意識を涵養する棚「からだといのちの図書コーナー」を設置することが望ましい。

### 2) 多角的な資料を用意

主な所蔵資料は、医学書や診療ガイドライン、闘病記や介護記、いのちの絵本や医療マンガなど、一見、医学的な情報でないものもある。様々な立場や価値観から医療を俯瞰・選択できることが必要である。

### 3) 探しやすさの工夫

「闘病記」を約1,000冊以上集めた「闘病記文庫」は、約200種の病気ごとに分類して、同じ病気の人の体験談を簡単に手に取れるようにしてある。このように病名を手掛かりにすることや小コーナーをつくることで、その存在をアピールすることで、情報アクセスを容易にする。

### 4) 独立した医療コーナー

館内に大きく目立つサインを掲げ、「健康・医療」をアピールすることも必要である。他の多くの書架の中に存在を埋没させるのではなく、豊富な医療情報源へのアクセス保障を印象づけるためにも、独立したスペースを設置は大切なことである。視覚化することで、資料そのものへの認知度アップに貢献する。



独立させたコーナー

写真提供：健康情報棚プロジェクト

#### 5) 健康情報の冊子・リーフレット

健康・医療に関する情報を掲載した冊子・リーフレット類を、医療機関や関係団体等から収集し提示する。部数を多数入手が可能な資料については、自由に持ち帰りすることもできる。

#### 6) 闘病記

当事者のみしか知らないつらい心情や不安を赤裸々に綴った手記が、「闘病記」という形で出版されている。患者や家族が病気と向き合う気持ちが書かれている。「病気と闘う」という内容より、「病気を抱えながらも、普通の人として生きる」という当事者の視点が描かれているのが特徴である。「患者の気持ちを知りたい」と、看護師や医学生などの利用も多い。



病名ごとの見出しの棚

写真提供：健康情報棚プロジェクト

#### 7) がん情報

国立がん研究情報センターのパンフレット類を入手し積極的に提供する。がん対策基本法は、がんに対する情報提供の重要性を強調している。がんは、日本人の2人に一人がなると言われており、この冊子では、病気に伴う医療情報とともに、病気に関する直接情報以外に家計や就労、ボディーイメージなど、生活や仕事に大きく関係する様々な不安や疑問に対する情報が掲載されている。

#### 8) 緩和ケア情報

緩和ケアとは、身体的・精神的な苦痛を和らげるための医療である。終末期だけでなく、がん治療の初期段階から行われることもある。緩和ケアに関しては、まだ情報が不足しているため、誤解やネガティブ・イメージも少なくないのが現状である。

#### 9) 医療者理解のための情報

患者は、医療者に多くを求めているが、現実の問題として、医療を提供する医療者の労働環境や医学知識をアップデートする姿勢については、案外知られていない。市民の健康を守る医療者の現実の姿を知ること、より主体的に医療に関わる第一歩となるものではないか。病院や医療者の立場や考えも知ることで、患者と医療者とのコミュニケーション不足を補完することができる。医療者の生の声を記述したエッセイのような、医療者たちが自ら自分たちの立場や置かれている状況について、触れている資料は貴重である。医師自身が自分の健康を守り、学習していくための資料もなくてはならないだろう。街の医療者を守ることは、同時に市民を守ることにつながることを忘れてはならない。

#### 10) 医療マンガ

格式ばったイメージを持たれがちな医学・医療の問題であるが、マンガという表現ジャンルを通して、より身近な存在として感じることができる。このジャンルについては、以前は、「ブラックジャック」に代表される天才外科医などが描かれることが多かった。現在は、内科医や心療内科医、へき地医療に取り組む医師、看護師や薬剤師など、様々な医療職種の方たちが主人公になっている。同時に専門医が監修をしているため、リアルで生活観ある医療者像を知りうるメディアでもある。日常的に医療に対する意識を養う機会を提供することにもつながる。



医療マンガの棚

写真提供：健康情報棚プロジェクト

#### 11) 新聞記事の切り抜き情報

新聞の医療欄の記事は、難しい医学の情報をできるだけ多くの人が理解できるようにやさしく書かれている。身近な新聞記事から、自らの健康状態に関心を持つきっかけや、患者団体などを知る情報として大きな力を発揮している。また、新聞記事はテーマで蓄積される切り抜きファイルとしてまとめられると、地域医療の記録にもなる。

#### 12) からだといのちの絵本

医療情報資源には、生老病死に関する絵本なども位置づけられる。現在は病気だけでなく、将来の患者になることがありうる子どもたちには、無関心のままその状況に置かれたときにあわてないためにも、日頃から自らの心身に対して関心を持ち、セルフ・メディケーション意識を持つことが近年言われてくるようになった。普通、公共図書館の児童書コーナーに置かれている、人体、栄養、障害、保健体育、性教育などの資料を、

生老病死で分類し一箇所にまとめる試みもなされている。小中高校での「いのちの授業」を支援する棚として、学校図書館にも設置しているところもある。

## 【6】資料特性を活かした事例

筆者(西河内)は、2014年まで5年間ほど、滋賀県の2つの町の図書館長を経験した。それ以前に働いていた東京と比較すると、滋賀県は十分な医療環境にあるとはいえなかった。近隣の病院へ通うだけでも、以前よりは大変な状況であった。そのような医療機関の選択肢が限られている地域にきて、あらためて公共図書館による健康・医療情報の提供の必要性をより強く感じたのである。館長として勤めた最初の図書館では、かねてより健康・医療情報を提供するサービスのコーナーの設置を職員が望んでいたこともあって、積極的に取り組むこととなった。

ここではそうした事例を紹介する。滋賀県愛荘町立秦荘図書館の「ほすぴたな」という「健康・医療情報コーナー」である。この名称は、病院を表す「ホスピタル」や「ホスピタリティ」(親切心)と書架を表す「棚」を合わせた造語で、コーナーづくりを担当した司書が考案した。この「ほすぴたな」は、多くの図書館で見られる「闘病記文庫」のコーナーではない。「闘病記文庫」は、文学やエッセイに分類される「闘病記」を一か所にまとめ、病名分類することで、病いの語りへよりアクセスしやすくしたコーナーである。多くの図書館では「闘病記文庫」をコーナーとしている。しかし、「ほすぴたな」は総合医療情報コーナーの役割を持たせるために、図書館が既に持っている資料や情報源を様々に組み合わせているのが特徴である。



医療情報コーナー「ほすぴたな」の広いスペースの一部

「ほすぴたな」の資料には、約1,000冊の闘病記を約200種の病気ごとに分類して、同じ病気の人の体験談を簡単に手に取れるようにしてある。「闘病記」は患者の体験記であるが、「闘病記」だけでは患者ニーズに対応できないことは明らかなため、病名分類の見出しに合わせ「闘病記+治療法の本」という混在した棚を作っている。これまでの公共図書館では、「闘病記」は文学の棚、「治療法」については医学書の棚と分離して置かれていた本を「同居」させ、病気についての医学知識と生活者視点の情報を一箇所で入手できるように工夫している。





心臓に関して治療法と体験記を一箇所に

特に力を入れているのは、患者会が発行した資料や情報の収集・提供である。館長として筆者（西河内）は滋賀県内の難病患者団体などを直接訪問し、資料提供のお願いにまわった。図書館は、患者会から会報などの寄贈を受ける機会もある。多くの図書館ではそうした資料はもらいっぱなしで、住民がきちんと利用できる形になっていないこともあり、寄贈者である患者会から不信を持たれているケースも少なくない。直接に患者団体を訪問するのは、そうした不信を払拭し、患者会が発信する情報を図書館が提供することの意義と重要性をわかっていただくためだった。利用者の評判では「ほすぴたな」は、病気関連の情報が一箇所で手に取れると好評であった。

例えば、アレルギーの棚を見てみると、アレルギー関連の棚の見出しだけでも、7つある。「アレルギーについて知る」、「食物アレルギー」、「アレルギーの安心レシピ」、「アトピー性皮膚炎」、「ぜんそく」、「花粉症」、「アレルギーに負けない」。

ここでは家庭医学書の他に、専門医学書や診療ガイドライン、アレルギーをわかりやすく描いた絵本、製薬企業のパンフレットや患者会の会報・刊行資料が、一緒に並べてある。アレルギーだけで150冊以上の本があるだけでなく、様々な観点・発行形態の資料が提供されている。医学書だけの一面的な情報提供に比べ、市民・患者は「生活に医療がどのように関わるか」を理解しやすい提供方法となっている。このようにひとつの病名のもとに、医学書、診療ガイドライン、家庭医学書に加え、患者団体情報、闘病記、介護記、絵本など多様な観点の資料により病気を理解する「情報の串刺し」を実現している。



アレルギーについて「情報の串刺し」がされている

「はすぴたな」の主な所蔵資料には、医学書や診療ガイドライン、闘病記や介護記、いのちの絵本や医療マンガなど、一見して医学的な情報でないものもある。様々な立場や価値観から医療を俯瞰・選択できる多彩な資料を用意し情報環境を整備している。患者会資料やパンフレット類は、整理しファイルボックスに収めている。小冊子やパンフレットは、背表紙がないことが多いため整理が難しい。それに対応する方策として、愛荘町のもう一つの図書館である愛知川図書館で行ってきた地域資料の整理の手法を使い、整備・配架している。

#### 【7】 まとめ～患者当事者に利用に耐える資料提供とは

図書館自身が、患者の欲しい情報は、必ずしも病気の情報が中心を占めるものではないと認識すれば、その資料提供の仕方も自ずと変わらざるを得ない。

では、そのためにはどうすればいいのだろうか。まずは、患者の生の声を聞くことである。異なる患者団体の集まりや講演会に最低でも3つ程度、参加してみると患者・家族が欲する情報の中身が把握できるだろう。患者会活動の意義、病気の実態や傾向がわかり、地域が抱える問題も浮き彫りになってくる。そうした取り組みが大事なのである。患者会の側から、図書館に働きかけることはめったにない。現実の患者会側の認識は、そもそも公共図書館を患者会の情報発信をサポートする公共施設としては、位置づけていないからである。

公共図書館に、健康・医療情報を期待して来られる方はいったいどれくらいいるのだろうか。そもそも、図書館に行き、こうした情報を入手しようと思いつく人は、これまではほとんどいなかった。現実を求める情報（患者会の連絡先すら知らない図書館だった）がないからだった。健康・医療情報の提供サービスと言っても、現実にはわずかに来館したコーナー利用者の、わずかな感想で右往左往している現状では、患者ニーズを十分に掴めるまでには至っていないのである。患者さんは、とおり一遍では、決して本音を語らない。患者会の役員ですら、何度も話を聞いて関係性ができてからでないと把握できないという。

公共図書館は、その弱さを自覚して、もっと患者当事者の本音をつかむ努力を組織的にすることである。患者会や地域住民の健康に関わる第一線機関である保健所をはじめとした関係機関・団体と連携しながら、取り組んで欲しい。それには、図書館自らのサービス方針について、患者へ投げかけることをしなければ、先方から有用な情報を引き出すことはできない。患者さんが図書館に来るのを待っているのではなく、図書館が、患者当事者へ御用聞きに行くくらいの姿勢が必要なのである。

公共図書館が、「患者の欲しい情報は、病気の情報だけが中心ではない」と認識すれば、資料提供も自ずと変わらざるを得ない。ではどうすればいいのか。まずは患者と協働することである。患者会や地域の疾病の傾向

などの情報を持ち、保健所や関係諸団体と連携しながら、患者当事者の本音をつかむことに取り組むことである。そもそも自らのサービス方針を明確にしなければ、先方から情報も引き出すことはできない。そして、さらには自館の所蔵資料を総動員した棚づくりを試みることである（医学に加え、福祉・障害、絵本、地域資料 etc.）。公の教育施設である公共図書館から、ニーズにあった質の高い情報を提供されることの意義は高いのである。

がん情報の提供で、がんの治療情報だけでなく、がん患者の就労問題、生活問題に対して図書館でも、やっと「病気に付随する生活情報」が認識され始めてきた。以前は「闘病記は医療情報ではない」、「医学的に正確ではないため問題を抱えた資料である」とまじめにおっしゃる方もいた。その時もし、患者が医学情報だけを求めているのではないということがわかっていたら、決してそのような言葉はでなかったはずである。病診連携、地域包括ケアシステム、2025 年問題と、公共図書館では耳慣れないキーワードが話題になるが、少子高齢化社会や介護の担い手不足など社会問題がクローズアップされている現在、「正確で良質な医学情報を提供」という名目のもとで、患者当事者の願いからほど遠くなるという呪縛から、はやく図書館がとき離れて欲しいと願ってならない。

公共図書館の「健康・医療情報コーナー」の教科書やモデルになる図書館は日本にはないのが現状である。患者の声をしっかり聞くことが、患者当事者の利用に耐える「健康・医療情報コーナー」への成長を促す、第一歩ではないだろうか。患者さんに「図書館があって助かった」と言ってもらえるものは、一朝一夕にできるはずはない。図書館が、患者のニーズを積極的に探りに出かける姿勢は欠かせない。当事者視点を積極的に取り入れることで、公共図書館の患者に対する認識が変わっていくのなら、「病気になったら図書館へ」という標語が図書館に掲げられようになることも、あながち遠い未来のことではないと確信する。

（本稿は、第 42 回医学情報サービス研究大会（2015 年 7 月 18 日～19 日、北海道大学）で口演発表したものに加筆したものである。）

## 【引用・参考文献】

- ① 図書館をハブとしたネットワークの在り方に関する研究会、地域の情報ハブとしての図書館－課題解決型の図書館を目指して－第 3 章 5 取組課題候補Ⅲ：医療関連情報提供、文部科学省、2005-01
- ② JLA 健康情報委員会、公共図書館における健康・医療情報サービスの実施状況の調査報告、日本図書館協会（JLA）、図書館雑誌 108(4)、277-281、2014-04
- ③ 須賀千絵・田村俊作・池谷のぞみ〔他〕、日本の公共図書館における健康・医療情報サービスの実施状況：質問紙による全国調査の結果をもとに、日本図書館情報学会春季研究集会論文集、29-32、2013-05
- ④ 田村俊作・池谷のぞみ・須賀千絵〔他〕、都道府県立図書館による医療健康情報サービスの提供とその意義、三田図書館・情報学会研究大会発表論文集、25-28、2013
- ⑤ JMLA 医療・健康情報委員会、医療・健康情報サービス研修についてのアンケート結果報告、特定非営利活動法人日本医学図書館協会（JMLA）、2014-01
- ⑥ JLA 健康情報委員会、小規模図書館に見る医療・健康情報サービスの実践例、第 29 回医学情報サービス研究大会口演発表、2012-08
- ⑦ 石井保志、患者さんの人生を支える「情報支援」- クリニカルパスを応用したライフマップと健康情報棚 -, 看護学雑誌 72(8)、682 - 690、2008-08